

1918年のソヴィエト農村-1-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kajikawa, Shinichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00001050

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



1918年のソヴィエト農村（その1）

梶川伸一

本稿は次の章から構成される。

はじめに

第1章 飢餓の中の革命

第2章 食糧独裁への道（次号以下）

第3章 食糧部隊の編成と活動

第4章 貧農委員会と農民組織

註) 本稿での日付は1918年2月までは旧暦。用いられる単位は、1プード=40フント=16.38キログラム、また穀物貨車1輌は1000プードに相当、1デシャチーナ=1.09ヘクタール、1ヴェルスタ=1.06キロメートル。

はじめに—戦時共産主義とは何か

戦時共産主義研究は基本的には、例えば、E. Г. ギムペリソン、E. H. ゴロデツキー、またはイタリア人ソヴィエト史家S. マッレのように、第1次大戦と革命で解体された政治、経済の統合=中央集権化の過程として、検討されてきた。⁽¹⁾これら歴史観は、水平的地域的統合と垂直的中央集権化をベクトルに、戦時共産主義期の政治、経済の再編過程を分析することで共通の基底を持つ。⁽²⁾

このような観点に立てば、ソヴィエト権力の確立とは、十月革命直後の地方での混乱=地方分権化から地方の統合=中央権化の過程の謂いであった。この指標として、先ず1918年1月の労兵ソヴィエトと農民ソヴィエトの合同の第3回全ロシア・ソヴィエト大会がある。続いて、旧行政機関の解体期が2—3月に訪れる。この時期、トヴェリ、トゥーラ、オリョール、コストロマ、ヤロスラヴリ、スマレンスクで市ドゥーマが解体され、1918年1月のモスクワから4月のクルスク県に至るまで24県ゼムストヴォ参事会が解体された。⁽³⁾そしてこれは同時に、農村地方におけるソヴィエト権力の確立期として見做されている。例えば、T. B. オーシポヴァは

1918年3月末までに、中央諸県の91.2%の郷でソヴィエト権力が形成されたとして、この時期にソヴィエト権力が確立されたとする。⁽⁴⁾

しかしこの過程で特徴的なことは、郷より郡、郡より県段階で、農業諸県より工業諸県でソヴィエトの合同が先行したことである。⁽⁵⁾そして実際にはこの時期、農村権力としては様々な組織が存在していた。例えば、1918年2月、ベンザ県クラスノスロボド Краснослободо 郡オボチェンスカヤ Объченская 郷ノ村ではスホードの全体集会で、B村ではスター・ロスタではなく市民某が議長職を勤める全体集会で、またO村団では兵士の議長職の下に村スホードで、ドイツの最後通牒に関する審議が行われた。この他、別の郷では郷農民代表ソヴィエト議長の下に村団からの代表で、郷参事会で、郷ゼムストヴォで、この問題が審議された。⁽⁶⁾即ち、同じ郡、同じ郷でも様々な農民組織が存在していたのである。

更に、この時期に形成された農村ソヴィエト自体、ソヴィエト政府の農村権力機関と単純に同定することはできない。トヴェリ県ノヴォトルジク Новоторжк 郡ソヴィエト執行委員会は、政府の穀物固定価格を遵守することなく、それより10倍近くも高い1プード45ルーブリの価格で穀物調達を行っていた。⁽⁷⁾1918年4月には、ヴィヤトカ県ソヴィエト大会は全県でソヴィエト政府の定めた穀物固定価格を廃止した。⁽⁸⁾このほかアストラハン、カザン、タムボフ県ソヴィエトも穀物固定価格を廃止した。1918年3月と5月のサマラ、シムビルスク県ソヴィエト大会は穀物専売を破棄する決議を採択した。⁽⁹⁾

このような県ソヴィエトの党派性の雰囲気を、1918年2月24日の労、兵、農代表ソヴィエト第1回クルスク県大会は次のように報じている。「議事録では、大会に489人の代議員が到着し、そのうちボリシェヴィキは206人、シンパ35人、エスエル164人、不明84人と述べられているが、これは現実と合致していない。第一に、大会議案は純粹にエスエル的性格を帯び、大会のそのような党の力関係ではそのようなことが起こり得なかった、第二にボリシェヴィキのフラク會議で、大会の議事録が指摘しているような、ボリシェヴィキが多数では決してなかった。明らかに、大会に到着した代議員は自分をボリシェヴィキと呼んだのだ、何故なら「ボリシェヴィキ」は農民の間で非常に人気があったので…」⁽¹⁰⁾。

以上の実例は、幾つかの地方ソヴィエトは、政府機関の末端組織として機能していなかったことを示している。従って、農村におけるソヴィエト権力の確立を考察する場合、郷ソヴィエトの形成の数的増加のみで語ることはできない。農村の具体的状況の中で、農民組織の形成過程が考究されねばならない。

つまり戦時共産主義期とは、ある意味では理論と現実の乖離、幻想と幻滅の混在、行政=管理と自然発生性の確執の時代であった。

十月革命以前のボリシェヴィキの綱領とは異なり、「土地についての布告」では、土地は国有化されたものではなく、共同体的利用となった。しかし本稿では同布告よりボリシェヴィキ権力は農民への譲歩を示したとする通説には与しない。⁽¹¹⁾第一に、農村での権力基盤の脆弱性か

らボリシェヴィキには他に選択の余地がなかった。第二に、1918年春の農業＝土地革命は農民独自の運動の帰結であり、従って、ここでの革命は組織的、平和的形態ではなく、特に「土地飢餓」⁽¹²⁾が深刻であった中央黒土地帯では暴力的であった。⁽¹³⁾第三に、一次的彌縫策でありながらその後もボリシェヴィキ政権は農業革命の明確な展望を持たず、農業生産の向上と結合させなかつたがために、食糧を農民から収奪する以外にロシア革命は存続できなかつた。土地革命が農業革命と有機的に結合されなかつたため、都市と農村の緊張関係が逆に昂進されたのである。つまり、土地布告の発布後、農村共同体の社会的自治と経済力は大きく増える一方で、⁽¹⁴⁾食糧問題、特に穀物調達問題を通して農民と権力の対立が尖鋭化する構図がネップ末期まで続くことになるのである。

共同体農民の輩出は小商品生産者＝小ブル農民を創り出したことを意味する。特に農村では「非合法」商業、即ちかつぎ屋行為が跋扈した。専売化された穀物が投機価格で販売され、大きな商業利潤が仲介人の懷に入った。こうして農村市場は賑わいを見せながらも、商業仲介人が怨嗟の的になつたのもまた事実であった。「商人 *торговец*」は「投機人」、「奸商 *мародер*」と同じく「人民の敵」を意味した。⁽¹⁵⁾このため、幾つかの地方で自然発生的に商業が国有化された。1918年9月、モギリヨフ県ゴルキ、タムボフ県モルシャンスクで私的商業の商品、備品が没収され、ソヴィエト小売店が開かれた。⁽¹⁶⁾10月、ブリャンスク県トゥルブチエフスク市で全私的商業が国有化され、商店は差し押さえられた。⁽¹⁷⁾それに加えて、商業の現物化と貨幣の減価は、レーニンが当初抱いていた構想、「社会主義に関しては、それは商品経済の根絶にあることは周知のことである」⁽¹⁸⁾状態が、迫っているように思われた。ここで、都市と農村との交換の組織としての「商品交換」制度が生まれた。この構想は既に、1918年1月21日の第1回全ロシア食糧大会の決議に現れ、その中では「集荷場に充分な量の農民穀物を引き入れる目的で、大会は国家的規模で組織された商品交換を確立することを必要と見做す」と述べられた。⁽¹⁹⁾この構想は過渡期の経済政策の中に位置づけられていたからこそ、1918年4月の第1回最高国民経済会議で、トーラーリンは『ソヴィエト権力の経済政策』報告の中で次のように発言した。「我々はできるだけ紙幣なしでやって、貨幣が単なる決済単位でしかなくなるような状況に至るように、新しい原理で国内で生産物の商品交換を確立しようとする構想に達した」。⁽²⁰⁾しかしこれは幻想でしかなかった。商品交換制度は、1918年の春から夏にかけての僅か2、3ヶ月で崩壊した。⁽²¹⁾これ以後、かつぎ屋が全土に猖獗し、都市労働者部隊が農村からの穀物の汲み出しを図るようになる。けだし、かつぎ屋こそが最も活発な商品交換の担い手であった。

また貨幣はその意味を失っていた。しかしこれも、ソヴィエト経済体制が、後の財務人民委員ソコリーニコフが「生産の商品的性格の死滅と同時に、貨幣の商品的性格も死滅する」と想定した、社会主義の一定段階に達したことを意味しなかつた。生産の低下と紙幣発行の増加が、インフレを昂進させ、貨幣の減価を促進した結果にすぎなかつた。1918年7月1日から21年1月1日までに、紙幣発行量は26.7倍に増加し、ルーブリ購売力は188分の1に減少してい

⁽²³⁾ た。1921年3月の第10回ロシア共産党大会で、E. A. プレオブラジェーンスキイが、「フランス革命でフランス・アッシニヤ紙幣は最悪の時で500分の1に減価した。我がルーブリの価値は2万分の1にまで減価した。即ち、我々は40倍もフランス革命を追い越した」と皮肉ったのがこの現象であった。⁽²⁴⁾

社会主義農業の建設もまた幻想であった。既に1918年に集団経営の組織化が開始されたにも拘らず、そのうちで最も普及した形態であるアルチェリに、1920年で農民経営の僅か0.5%が統合されただけであった。⁽²⁵⁾ 集団経営での労働条件は劣悪で、単位面積当たりの穀物収穫の余剰も少なかった。⁽²⁶⁾ 1920年秋以後の農業論争の中で、農民経営の直接社会主義経営への変革はユートピアであるとの共通認識が生まれつつあった。同年12月末の第8回全ロシア・ソヴィエト大会でレーニンは、農民に工業製品を充分に共給できない間は、農業の社会主义化は空想である、と語った。⁽²⁷⁾

ロシア革命後に生まれた理念的社会主义像は幾つかの幻想を産みだし、ある程度この幻想が戦時共産主義を支えていた。そして幻想から徐々に解放される過程が、ネップへの移行期と表現することもできるだろう。

これはまた次のことを意味する。ロシア十月革命とは、都市における労働者統制から国家管理を目指す社会主义革命と、農村における共同体農民=小生産者体制を創り出した農業革命からなる複合革命であった。⁽²⁸⁾ この農業革命を社会主义革命と同定したことが幻想を産み出す素地となった。長尾 久は十月革命に関する先駆的著作の中で、1917年の先頭に立っていたトゥーラ、ヤロスラヴリ、タムボフ、オリョール、ニジェゴロド、リャザン、クルスク、ペンザ、ヴィヤトカ諸県をはじめとする1918年の大規模な農民蜂起をもって、「全社会的に十月革命は分裂・解体し始めたのである」とし、B. P. ドゥミトレーンコは、ようやく1918年夏に労農同盟が決裂したとし、⁽²⁹⁾ B. B. カバーノフは、食糧割当徵發が必然的に農民を国家に敵対する側に追いやったと見做している。⁽³⁰⁾ 果して彼らが主張する時期まで労農同盟は実在したのだろうか。寧ろ一般的概念としての労農同盟こそが幻想ではなかろうか。この複合革命の展開は都市と農村の対立を必然化させ、特にボリシェヴィキの食糧政策は十月革命直後から農民との緊張関係を孕ませていたのが眞実に近いように思われる。フランスの歴史学者マルク・フェローは、「それは農村に対する都市の、そして農村の都市に対する一つの戦争であった」と指摘する。⁽³¹⁾ このように都市対農村の対立が複合革命の帰結であるなら、従来ソヴィエト史学でクラーク反乱と解釈されてきた農民反乱を、この文脈で再評価することもまた必要ではなかろうか。

本稿では、1918の農村状況を背景にロシア革命の幻想と現実の乖離の一断面を、ボリシェヴィキ権力と農民との関係の中で論じようと思う。

(1) см. Гимпельсон Е. Г. Великий Октябрь и становление советской системы управления народным хозяйством. М., 1987.; Городецкий Е. Н. Рождение советского государства. М., 1987; Malle S. The economic Organization of War communism, Cambridge, 1985.

- (2) 最近は、詳細な農業経済の内在的=構造的分析に依拠する B. B. カバーノフ、アルヒーフ資料を駆使してヴォルガ地方の農村組織の実態的研究を著したイギリス人研究者 O. ファイジェス Figes、同様にトヴェリ県を中心に農村内部の食糧調達問題にまで肉薄したアメリカ人研究者 L. T. リー Lih などの新しい傾向が示されている (Кабанов В. В. Крестьянское хозяйство в условиях "военного коммунизма" М., 1988; Figes O. Peasant Russia, Civil War. Oxford, 1989.; Lih L. T. Bread and Authority in Russia, 1914-1921. 1990, California.)
- (3) Городецкий Е. Н. Указ. соч., с. 288-89.
- (4) Осипова Т. В. Развитие социалистической революции в деревне в первый год диктатуры пролетариата — Октябрь и советское крестьянство. М., 1977, с. 46.
- (5) Кострикин В. И. — История советского крестьянства. т 1, М., 1988, с. 40.
- (6) Красный архив, 1939, т 60, с. 157-58.
- (7) Переписка Секретариата ЦК РСДРП(б) с местными партийными организациями. М., 1957, т 2, с 90.
- (8) Изв. Наркомпрода, 1918, № 10/11, с. 25.
- (9) Осипова Т. В. — История советского крестьянства. т 1, с. 65.
- (10) Шестаков А. В. Классовая борьба в деревне ЦЧО в эпоху военного коммунизма, М., 1930, с. 31-32.
- (11) 例えば、レーニンは「農民革命の志向や実践には干渉しない、それを尊重する、と宣言することで、連帯を表明したのである」(強調—引用者)とする和田春樹論文『岩波講座 世界歴史』24巻, 1970年, 392頁。
- (12) Кабанов В. В. Вопросы истории, 1989, № 11, с. 29.
- (13) Шестаков А. В. Указ. соч., с. 19.
- (14) Figes O. op. cit., p. 245.
- (15) Дмитренко В. П. Советская экономическая политика в первые годы пролетарской диктатуры. М., 1986. с. 17
- (16) Известия ВЦИК, 1918, 6 сент
- (17) Известия ВЦИК, 1918, 27 Окт
- (18) Ленин В. И. Полн Собр. соч., т 17, с. 127 『19世紀ロシアの農業問題』
- (19) Красный архив, 1939, т 97, с. 14.
- (20) Бюллетени Высшаго совета народного хозяйства, 1918, № 1, с. 30. そしてラーリンは早くも1918年末に直接的な貨幣なし交換への移行を主張する見解を持つに至った(Правда, 1919, 1 янв.)。そして現実に1921年1月21日、人民委員会議は財務人民委員部に貨幣計算から新しい価値単位への移行に関する条例草案を作成するよう指示した(Биллик В. И. Исторические записки, 1967, т 80, с. 141.)。
- (21) この時期の商品交換の構想と崩壊過程に関しては、拙稿「ロシア革命直後の食糧政策」、『史林』66卷2号、1983年参照。
- (22) Сокольников Г. Я. Финансовая политика революции, т 3, М., 1928, с. 291-92
- (23) Гимпельсон Е. Г. Вопросы истории, 1963, № 5, с. 41
- (24) Десятый съезд РКП(б): Стеног отчет, М., 1963, с. 426.
- (25) Гимпельсон Е. Г. “Военный коммунизм”, политика, практика, идеология. М., 1973, с. 81
- (26) Кабанов В. В. Указ. соч., с. 246-50.
- (27) Ленин В. И. Полн Собр. соч., т 38, с. 204.

㉙ 同論文でポクロフスキーやクリッツマン学派を積極的に援用するカバーノフは、複合革命について1921年11月のポクロフスキーの興味ある言葉を引用する。「我々は一つでなく二つの革命が起こっていることを体得しないうちは、ロシア革命で何も理解できないであろう、一つは世界的で、……要するにこれはマルクスから始まる革命である」。もう一つは、農民革命で、これは18世紀末から続き150年の間農民は自分の労働の余剰生産物を自由に処分できる権利のために闘ってきた「プガチョフの縁者」である（Кабанов В. В. Указ. статья, с. 31.）。

㉚ 長尾 久『ロシア十月革命の研究』、社会思想社、1973年、413頁。彼は現実的に遂行された土地の社会化とボリシェヴィキ綱領の理念としての国有化の「天地の差」が、農民と権力との暴力的対抗を必然化させたとするが（尤も権力側にこのような意識がなかった訳ではない、1918年1月21日の第1回全ロシア食糧大会の決議の「国家資産であり人民資産となる穀物」（Красный архив, 1939, т. 97, с. 14.）や同年5月30日付け人民委員会議の訴えの「土地と工場だけでなく、穀物も全人民資産とならねばならない」（Известия ВЦИК, 1918, 1 июня.）との表現から看取される）、1918年の農民反乱はこのような土地政策より寧ろ食糧政策に係わる問題である。

㉛ デミトレンコ В. П. История СССР, 1990, № 3, с. 5

㉜ カバンノフ В. В. Указ. статья, с. 36.

㉝ Ferro M. October 1917, London, 1980, p. 137.

㉞ ソ連史学の大家ミーンツは「不完全な資料によれば1918年春にヴォロネジ、タムボフ、クルスク、オリョール県で54の大クラーク反乱が起った」とする（Минц И. И. Год 1918-й. М., 1982, с. 289.）。ソ連でのこのような解釈への批判的言及についてはカバンノフ В. В. Указ. статья, с. 36. 参照。

第一章 飢餓の中の革命

1917年の二月革命から十月革命に至るまで、民衆の主要な要求は、土地、平和、パンに要約された。⁽¹⁾先ず、ソヴィエト権力樹立の宣言と共に第2回全ロシア・ソヴィエト大会で発布された「土地に関する布告」により、土地の私的所有権が廃止され、没収された土地は村団により共同体農民の間で再分配された。平和については、後にドイツ軍の侵犯により事実上無効となったもののブレスト・リトフスク条約（1918年3月3日）により、革命ロシアは戦線から離脱した。後にこれらが幻想でしかないことが明らかになるのだが、一応は土地と平和は解決された。しかしパンの問題はより深刻であった。臨時政府と同様、ソヴィエト権力も食糧問題で合理的、実践的プログラムを欠いていた。食糧問題での「ボリシェヴィキの明らかな無知、明らかな無理解」を役人たちは嘆いていた。⁽²⁾

「十月革命は帝国主義の弱い環を打ち碎いたが、西欧の社会主义革命は遅れた。ソヴィエト・ロシアは包囲された。「ブレスト」はこの孤立を強めた。……その結果、過渡期のマルクス理論のモデルと革命の進展の現実との大きな乖離が露わになった」。食糧問題は未解決として残されたが、農業=土地革命はこの問題の解決をより困難にした。分与地を受け取った農民は、独立した経営権を得ようと務めた。「農村は税を支払わず、固定価格、穀物専売に反対した。これは既に狭い社会ではなく大衆的運動であった」。⁽³⁾ソ連経済史家ドゥミトレーンコはこのよ

うに1918年春の状況を要約する。従って、食糧問題はその後のロシア革命の帰趨を決定する最も重要な要素の一つとなった。そして、ロシア革命の歴史は飢餓の歴史でもあったが故に、食糧問題はこの中に一層重要な役割を果たした。

- (1) 1917年10月25日付け新聞「ラボチー・プーチ」の巻頭には、「全ての権力を労、兵、農代表ソヴィエトへ、平和！パン！土地！」とある。
- (2) Lih L. T. op. cit., p. 119.
- (3) Дмитренко В. П. Указ. статья., с. 4-§.

1) 首都の飢餓

1917年2月半ばで、ペトログラードには全部で66万4000プードのライ麦粉と5万プードの小麦粉しかなく、市参事会によれば、これは一人1フントで20日分のパンに相当した。二月革命の直前、2月25日までに麦粉貯蔵は更に1/3減少した。新聞「レーチ」はこの間の食糧事情を次のように報じた。

「首都では初めて、ブリン〔謝肉祭用の一種のクレープ〕だけでなくパンさえも充分ない謝肉祭を体験している。……麦粉の貯蔵のないものは、大金でもそれを手に入れることができない。小さな小売店やパン屋で、何千もの住民は凍てつくマロースにも拘らず、白パンや黒パンを手にしようと期待して、列についている。小さな小売店の多くは、一人に1.2フント以上を売れない。住民は必要な量のパンを手に入れるため、自分の家僕と一緒に小売店に行くか、様々な小売店で何度も列につかねばならない⁽¹⁾」。

二月革命も都市の飢餓から始まった。革命直後にペトログラード市の食糧業務は国家ドゥーマと労兵代表ソヴィエトの食糧委員会（コミッシャ）の管轄となり、ペトログラードの住民にライ麦1 1/4フント、重肉体労働者には1 3/4フントが各々市役所と工場委員会から交付されることが決定されたが⁽²⁾、4月に配給は3/4フントに縮小された。再びパン小売店には長蛇の列が現れ、明け方から婦人たちは疲れきった表情で列に並んでいた。⁽³⁾状況はモスクワでも同様であった。1917年3月12日に行政コミサールは、食糧危機は麦粉が入荷しないために尖鋭化している、多くのパン焼場でパン焼きはほぼ半分に減少した、例えば、ある地区的パン焼場は180プードのところを75プードしか焼いていない、住民の不満が認められる、と報告した。⁽⁴⁾地方都市でも事態は深刻であった。1917年4月にはアストラハンから、焼きパンが不足し、都市から全面的に麦粉が搬出されるとの風聞のために、市では騒乱状態が続いている、朝から街頭で不穏なミーティングが開かれ、そこでは執行委員会、臨時県知事、県食糧委員会の逮捕が要求された、ソヴィエトは統制委員会を設置し隠匿食糧の摘発に乗り出し、何人かを逮捕した、と報道された。⁽⁵⁾

収穫期を過ぎても飢餓は好転しなかった。十月革命の蜂起の日、ペトログラードの食糧倉庫

は殆ど空であった。10月28日の穀物貯蔵は3万プードしかなく、半フントの配給券で1日分にも不足するほどであった。⁽⁶⁾

十月革命以後は、更に昂進する運輸の解体、地方分権主義傾向により食糧事情は一層悪化した。1918年1月7日にはペトログラードへの穀物搬入の異常な困難とライ麦と小麦貯蔵の消尽のため、パンの基本配給は1日1/4フントにまで縮小され、1月21日以後ようやく半フントにまでなった。⁽⁷⁾この状態は以後改善されることなく、5月には、「ペトログラードの食糧は異常な破滅的状態にある」との訴えが再三出されるまでになった。⁽⁸⁾ペトログラード中央食糧ソヴィエト参事会の決定により、5月19日以後、パン配給券の交付量は1日基本配給券で1/8フント、追加配給券で3/8フントに縮小された。⁽⁹⁾ペトログラードの病院では、1918年1～6月に、156人が病院に運ばれて餓死したが、そのうち55人は5月中に。また医師の話では、患者の多くは肉体労働者、失業者、商人で、彼らは酷い栄養失調で、大抵は24時間以内に餓死した。⁽¹⁰⁾

飢餓の5月に、更に厳しい6月が続いた。ペトログラード中央食糧参事会は、穀物列車の遅延のため、6月8、9日にはパンが全く引き渡されず、その替わり半フントの馬鈴薯と乾燥野菜が交付されるであろうと報じた。⁽¹¹⁾

モスクワの食糧状態も決して良くなかった。1918年7月末には一人パン1/8フントの配給基準で、一週間の穀物が残されていただけであり、ある地区ではパンを配給することができなかつた。⁽¹²⁾6月には、モスクワ市の幾つかの周辺郡では、食糧が入荷しないために飢餓一揆さえ起つた。⁽¹³⁾7月には、モスクワの幾つかの地区では労働者パン配給券は1/4フントしか交付されず、その他の地区ではパンに替わり挽割、蕎麦、その他が交付された。⁽¹⁴⁾

首都は飢餓を克服するために、先ず市内の食糧探索を行った。ペトログラードではこのため、クロンシュタット水兵と労働者からなる部隊が編成され、1917年11月までに市内全域で8万プードの麦粉、5万プードの砂糖、3万プードのキャベツを摘発した。⁽¹⁵⁾

しかし大戦開始の3年目（1916/17年度）以後、自由穀物商業の制限と穀物の抵当化の禁止のために、都市での穀物商業貯蔵は急速に減少し、従来のように卸穀物商人、製粉業者、銀行家の手には今や穀物はなく、生産者＝農民の手にそれらは握られていた。

従つて、必然的に、「国内に食糧はある。地主、クラーク、商人の所に腐りかけの大量の食糧がある」との前提に立った食糧探索は、都市から地方＝穀物生産地区へと拡大せざるを得なくなり、これ以後ソヴィエト政府と農民との間で、文字通り生死をかけた対立が生じたのであつた。

(1) Лейбера И. П., Рудаченко С. Д. Революция и хлеб. М., 1990, с. 59-60. から引用。

(2) Известия советов рабочих и солдатских депутатов, 1917, 2 марта.

(3) Известия советов рабочих и солдатских депутатов, 1917, 2 мая.

(4) Красный архив, 1937, т. 18, с. 129.

- (5) Известия советов рабочих и солдатских депутатов, 1917, 28 апреля.
- (6) Дмитренко В. П. Указ. соч., с. 35.
- (7) Известия ВЦИК, 1918, 7 янв. Правда, 1918, 18 янв.
- (8) Известия ВЦИК, 1918, 11 и 14 мая.
- (9) Известия ВЦИК, 1918, 29 мая. 労働者配給券による食糧の交付は、基準は3600カロリーであったが過減し続け、1918年6月には714カロリーにまでなった。ペトログラードの労働者B. カユーロフの回想によれば、5月には市では馬匹の一部が食いつくされ、週によっては労働者は配給券で穀物の替わりに、種子と胡桃が交付された（Декреты советской власти о Петрограде (1917-1918.) Л., 1986, с. 171.）。
- 5月初めにはペトログラードには穀物がなく、住民には馬鈴薯粉と残りの乾パンが交付されていた（Известия ВЦИК, 1918, 11 мая.）。
- (10) Изв. Наркомпода, 1918, № 8, с. 30.
- (11) Там же.
- (12) Изв. Наркомпрода, 1918, № 16/17, с. 42.
- (13) Известия ВЦИК, 1918, 8 июня. 食べるために売春婦となったソヴィエト職員の例、強盗犯の急増等については、Chase W. J. Workers, Society and the Soviet State. Univ. of Illinois, 1987, p. 21. 参照。
- (14) Известия ВЦИК, 1918, 24 июля.
- (15) Стрижков Ю. К. Продовольственные отряды в годы гражданской войны и иностранной интервенции, 1917-1921 гг. М., 1972, с. 36.
- (16) この時期ソヴィエト政府にとって最も重要な食糧問題は軍の食糧確保であった。この文言は1917年11月11日付けの軍の食糧確保に関する訴えからの引用（СУ, 1917, № 3, ст. 29.）。

2) 地方の飢餓

1917年の穀物貯蔵量とは1916年以前の貯蔵と1917年収穫からなる。以前の穀物貯蔵量は、ソヴィエト経済史家П. В. ヴォロブエフによれば、主に小麦とライ麦からなる約6億6900万プードがウクライナ、その他の穀物生産県にあり、これは1917年秋の調達カムパニアまで充分な量であった。⁽¹⁾ 1917年の主要穀物の総収穫は、戦前の水準に比べ酷い水準ではなかった。秋蒔、春蒔併せてライ麦の総収穫は1909—13年平均11億4170プードに対し、1917年は9億5181万プード（戦前平均収穫比83.4%）、同じく小麦は11億3582万プードに対し10億3410万プード（同91.0%）で、馬鈴薯を除く穀物総収穫は38億プードで、この数字は戦前より13.4%低い数字であった。⁽²⁾

しかし、戦争から革命期に至る運輸の崩壊、更には臨時政府時代の中央=地方権力関係の弛緩による地域的分断により、地方では厳しい穀物不足が創り出され、当時の機関誌、新聞には凄じいまでの飢餓の状況が報じられた。

1917年12月のヴィヤトカ県サラブリ郡カバク村には穀物がなく、飢えており、農民全員が穀物を購入していた。⁽³⁾ 同12月のペトログラード市ドゥーマ会議で、ロシアの多くの地方で住民は永続的飢餓に耐え、カルーガ、スマレンスクでは一人当たり食糧配給券で1カ月に半フントしか交付されなかった、と報告された。⁽⁴⁾ 革命時の飢餓状態は地方においても、

春から初夏の訪れと共に深まり、危機的状況を呈した。ヤロスラヴリでは一人当たりのパン配給が1月の8.5フントから4月には4.5フントに（1日当たりの量ではなく1カ月間の量が）低下した。⁽⁵⁾

モスクワ州食糧委員会には次のような情報が入った。「スマレンスク県ドゥーロフ Дуров から打電している。「我々に貸車の穀物を引き渡すよう要請する。窮地にある。飢えている」。コストロマから。「コストロマへ穀物の送付の措置をとって欲しい。飢えた郷では何千もの群集が、穀物を要求して食糧部隊を包囲している」。ヤロスラヴリから。「農村は1カ月に2フントの麦粉しか受け取っていない。活動する力はない。鉄道は貨物を滞貨させている」。スマレンスク県ベラゴ Белаго から。「食糧の到着は停止している。飢餓が突発した。一揆が起こっている。緊急に穀物を引き渡すようお願いする」。モスクワ県シェルコフカ Шелковка から。「飢えた群集は穀物を要求している。倉庫には穀物はない。ルーザ Руза とヴェレヤ Верея 市で一揆がある。病院はチフス患者で溢れている」。コストロマ県ユリエヴェツ Юрьевец から。「飢餓は人民の武装した群集を組織している。状況は殺人的である。ソヴィエトの権力が脅かされている」。

労働者は四散している。……何をなすべきか答えてくれ。……⁽⁶⁾」

地方からの報告はまだ続く。6月4日カザンから。街の通りには飢餓県から多くの乞食が現れた。執拗に一粒の穀物を請い、膝まづき、餓死させないよう哀願している。市には麦粉がなく、市食糧参事会は初めは一人5フントを引き渡していたが、貯蔵の消尽のため、この乏しい配給も間もなく停止した。リヤザンから。市にはライ麦粉、挽割、馬鈴薯は全くない。穀物配給は一人当たり、オート麦1/8フントであったが、何日後かには僅かな量の麩に替わった。市の住民は飢えている。穀物の代用にイラクサ крапива を食するものもいる（因に、カザン、リヤザン県は食糧人民委員部により、穀物が足る県と認定されている⁽⁷⁾）。ヴォログダから。幾つかの郡全体で、多くの家族は何週間も専ら麩を食べている。カドニコフ Кадников 郡では、そのような食事の結果、ある家族の4人の子供が失明した。⁽⁸⁾

このような恐るべき飢餓は、先ず工業労働者に自らの手で穀物を獲得するのを余儀なくさせた。食糧状態は破滅的で、これ以上の食糧受取の遅滞は、工場1万の労働者を餓死させる恐れがあり、泥炭鉱夫は既に作業を停止した、とウラジミール県ドゥーレフから、トヴェリ県ベジエツク市からは、職工と労働者は飢えており、仕事を投げ出して、生活を犠牲にして、穀物を探しに遠くの村に出かけることを余儀なくされている、と報じられた。⁽⁹⁾これがかつぎ屋である。食糧活動家 H. A. オルローフは革命初期の状況について、「消費者の需要の80-90%以上が私的商人とかつぎ屋により充された。ペトログラードでさえ、特にモスクワでは、金持ちの住民層の食糧の中でかつぎ屋は主導的役割を果たした」と指摘した。⁽¹⁰⁾1917年後半の農村調査では、村落の98%でかつぎ屋の存在が確認され、その住民の40%がかつぎ屋であった。⁽¹¹⁾クルスクやブリヤンスクからは毎日5000プード以上の穀物がかつぎ屋により搬出され、カマ河やベリ河には、

ライフル銃や機関銃で武装したかつぎ屋によりかき集められた穀物を満載した船が航行し、こうしたかつぎ屋はクルスク県には2万、タムボフ県には5万を数えると食糧人民委員ツュルーパは中央執行委員会で報告した。⁽¹³⁾ クルスク市では食糧参与 A.3.マヌイーリスキイを議長とするかつぎ屋との闘争に関する臨時委員会は、1917年5月から12月までにキエフ=ヴォロネジ鉄道だけで346万プードの麦粉がかつぎ屋により運ばれたことを確認した。⁽¹⁴⁾ また別の資料によれば、1918年春のクルスク県のかつぎ屋の活動は更に凄じく、同県だけで約20万人のかつぎ屋が毎日16万プードの穀物を運び出し、県の余剰穀物1500万プードのうち1400万プードが彼らにより搬出され、国家調達を解体させていた。⁽¹⁵⁾ かつぎ屋はカマ河、ヴォルガ河、カザン=サラブリ線を経由して、または荷馬車を使いパランガ *паранъга* 駅を経由して、大量の穀物を搬出していた。カザン県では、カザン・ソヴィエトの保護を受け、所によっては武装したかつぎ屋が、カマ河では水兵の匪賊も参加して、狼藉を働き、食糧貨物を略奪していた。

当然にも、かつぎ屋はソヴィエト政権の不動の食糧政策、穀物専売制と固定価格を損なうものとして、厳しく弾圧された。1918年6月18日付けで対反革命非常委員会ВЧКは、「あらゆる投機人、略取者と精力的に闘争することを決意し、……射殺に至る最も段固たる措置を厭わない」旨の指令を出した。⁽¹⁶⁾ またツュルーパと交通人民委員 В.И.ネフスキイの署名で全鉄道にかつぎ屋との闘争に関する電報が出され、鉄道管理部と保安部に、かつぎ屋との闘争で地方食糧組織を援助し、かつぎ屋が抵抗する場合には「武器に至る」圧殺措置を探るよう義務づけた。⁽¹⁷⁾ ヴィヤトカ県サラブリでは、6月に400人のかつぎ屋グループが穀物地帯を包囲し、武装した彼らは勝手に穀物を搬出し、穀物専売と固定価格の法を犯し、これを解散させるため、新たに300人の食糧部隊が派遣されていた。⁽¹⁸⁾ 農民はかつぎ屋との闘争は不可能だと感じており、彼らに共鳴さえしていた。⁽¹⁹⁾

次の情報が5月にモスクワ州食糧委に入った地方の状況である。

クルスクのエイジエントは打電した。「かつぎ屋の未曾有の流れが、今や食糧組織化のあらゆる秩序を損なっている」、「かつぎ屋は抑えようもない波となって、集荷の現地に殺到し、固定価格は犯され、調達は損なわれている。……活動は徐々に困難になっている」。ヴィヤトカ県エラブガ *Елабуга* から「C駅に武装かつぎ屋が到着した。貨物の防衛に派遣された水兵部隊の司令官を追いやり、2人が殺され、1人が捕虜となった。カザン・ソヴィエトに援軍が要請された。現地に力はない」と、伝えている。そこでカザンからの報道。「かつぎ屋が大量にやって来て、オフラーナを武装解除している。スパッスク *Спасск* でライ麦は18から60ループリに達した。100ループリまで行くであろうと思われる。固定価格は、歴史の分野から消えつつある。買付けのあらゆる可能性は破壊されつつある」。同様なことがあらゆる諸県で、モスクワに近いほど繰り返されている。かつぎ屋の波はロシア南部に留まらず、クルスク、ヴィヤトカ、ヴォロネジ等では抑えようもなく満ち溢れている、徐々に新たな障壁が食糧カムパニアの途上に現れている。かつぎ屋行為に比べれば、地方の状態はそれほど

大きな悪ではないだろう。⁽²⁰⁾

かつぎ屋の悪とは、先ず固定価格の侵犯にあった。この時期、即ち1918年の新収穫までは、生産地区での未脱穀のライ麦1ブードの県毎に定められた固定価格は約5ルーブリであったが、厳しい飢餓の中でこれが法外に高騰したのは当然であった。⁽²¹⁾これに関する情報は枚挙にいとまがない。

「地方からの情報によれば、5月1日までに確定された生産地区と消費地区のかつぎ屋商業の自由価格は興味ある特徴を示している。生産諸県の村と都市の価格で大きな差が認められる。例えばタムボフ県の村ではライ麦粉は1ブード18~30ルーブリで、タムボフ県の村ではライ麦粉は1ブード18~30ルーブリで、タムボフ市では45~50ルーブリ。幾つかの地方では小麦粉とライ麦粉の価格差は殆ど無い。エカチェリンブルクでは双方の価格は20~30ルーブリの間。消費地区では麦粉の価格は著しく高騰し、小麦粉とライ麦粉の本質的価格差が見られる。モスクワではライ麦粉1ブードは160~180ルーブリ。ペトログラードでは小麦粉ではなく、ライ麦粉は400~500ルーブリ。

その他の消費地区の大都市では、価格は殆ど同じで100~200ルーブリ⁽²²⁾」。

「かつぎ屋によりライ麦粉は1ブード当たり280~300ルーブリ、小麦粉は420~450ルーブリで販売されている。そのような異常な高価格にも拘らず、投機人の商業は止まるところを知らない⁽²³⁾」。

国家による穀物配給不足と異常に高騰する穀物自由価格は、都市労働者の生存を脅かした。

トヴェリ県ヴィシュニヴォロチョク Вышний Волочек 郡では、工場労働者は工場での作業を止め、穀物を求めて農村を歩き回る乞食になっていた。ここでは1918年4月以来、パンの配給は全く停止され、月350ルーブリを稼ぐ労働者は農村に赴き、クラークに1ブードの麦粉に300ルーブリもふっかけられ、枕、衣類、サモワールといった最後の家財道具も売り払い、何とか食糧にありついていた。⁽²⁴⁾都市労働者は生きるためにかつぎ屋になるか、故郷の村に帰るしかなかった。

こうして工業労働者の欠勤は一人当り、1913年の年間12.6日から1918年には29.0日に増加し、労働者当りの企業の作業停止も1913年の6.4日から1918年には42.0日に急増し、工場の生産性を、特に大企業で低下させた。⁽²⁵⁾またはペトログラードの幾つかの企業では労働時間内に食糧問題に関する会合が開かれ、操業が停止する場合があった。エスエルの拠点として知られるオブーホフ鋳鋼工場でも1918年の5月中旬に13日間、6月中旬に11日間操業が停止した。⁽²⁶⁾

そして飢餓は労働者、特に不熟練工、の都市からの離脱を促し、ペトログラードでは1918年4~5月中旬に、家族を含め5万9000人近くが農業諸県に疎開した。⁽²⁷⁾1918年春だけで、労働者は家族を含めて、約200万人が帰村したと言われる。⁽²⁸⁾

人口移動は都市から農村へ向かっただけではなかった。特に穀物の不足が厳しかった北部の農民は、穀物の豊かな土地を求め、または安価な穀物を求め、離村した。北部ヴォログダ県で

は、農民は二足三文で家財を売り払い、シベリアへの移住の志向を見せ、住民の1/3が離村した郡もあった。⁽²⁹⁾ 以前は最も革命的で、他より政治的に組織されたと見做されていたモスクワ北部のトヴェリ県ルジェフ Ржев 郡では、食糧機関は完全に崩壊し、住民は飢え、完全な食糧危機に陥り、大衆はシベリアかロシアの奥地への移住の希望を表明していた。また別の農民は、ライ麦粉が1 プード 8 ルーブリ⁽³⁰⁾、小麦粉が18 ルーブリと穀物価格が安く、良好な耕地のある地方へと移住していた。⁽³¹⁾ こうしてモスクワ、その他の北部州の土地から飢餓のために東部の穀物諸県へ移住する農民が余りにも多く、それは道路の運搬能力を超えていたほどであった。⁽³²⁾ 彼らを含め、十月革命から1918年秋までに、約20万人がシベリアへ移住した。⁽³³⁾

- (1) Волобуев П. В. Экономическая политика временного правительства, М., 1962, с. 384.
- (2) Сборник статистических сведений по Союзу ССР. 1918-1923 гг. М., 1924, с. 131.; Волобуев П. В. Указ. соч., с. 384.
- (3) Переписка..., т 2, с. 364.
- (4) Правда, 1917, 15 дек.
- (5) Изв. Наркомпрода, 1918, № 2/3, с. 6.
- (6) Лосов В. — Известия ВЦИК, 1918, 22 мая.
- (7) Известия ВЦИК, 1918, 19 апреля.
- (8) Изв. Наркомпрода, 1918, № 8, с. 29-30.
- (9) Изв. Наркомпрода, 1918, № 6/7, с. 35.
- (10) Изв. Наркомпрода, 1918, № 12/13, с. 54.
- (11) Дмитренко В. П. Указ. соч., с. 54-55.
- (12) Крицман Л. Героический период великой русской революции, 2-ое изд., М.; Л., 1926, с. 139.
- (13) Давыдов М. И. Борьба за хлеб, М., 1971, с. 95.; Плотоколы заседания ВЦИК 4-го созыва. М., 1920, с. 246.
- (14) Изв. Наркомпрода, 1918, № 8, с. 33.
- (15) Осипова Т. В. — История советского крестьянства, т 1, с. 62
- (16) Изв. Наркомпрода, 1918, № 8, с. 18.
- (17) Изв. Наркомпрода, 1918, № 12/13, с. 29.
- (18) Изв. Наркомпрода, 1918, № 10/11, с. 28.
- (19) М. Н. Изв. Наркомпрода, 1918, № 6/7, с. 38.
- (20) Известия ВЦИК, 1918, 22 мая.
- (21) 1918年の穀物価格の諸問題については、拙稿「十月革命と穀物価格」、『史林』66巻5号、1984年参考。
- (22) Известия ВЦИК, 1918, 30 мая.
- (23) Известия ВЦИК, 1918, 16 июня.
- (24) Переписка..., М., 1969, т 4, с. 197-99.
- (25) Крицман Л. Указ. соч., с. 193-94. ツュルーバの指令により、労働者から編成される食糧部隊は、穀物調達に非組織性と無統制を持ち込むのを避けるため大労働組合連合にのみ認可され（Известия ВЦИК, 1918, 6 авг.），これも大企業が労働生産性を低下させる要因となった。

- (26) Гоголевский А. В. Петроградский совет в годы гражданской войны, Л., 1982, с. 164.
- (27) Декреты советской власти о Петрограде (1917-1918), с. 158.
- (28) Кабанов В. В. Указ. соч., с. 214. ペトログラードでは18年前半で都市人口は147万8000人余りに減少したが、燃料、原料、食糧不足が企業閉鎖をもたらしたために、人口減にも拘らず失業者は11.6万人を数えた（Известия ВЦИК, 1918, 30, июля）。またニジェゴロドで4000人、モスクワで2月から4月までに約3万人の失業者が登録され（Беднота, 1918, 5 апреля。），都市での失業は深刻であった。彼ら失業者にとって階級的配給券の導入は特に厳しいもので、失業者食糧対策として、共同食堂が設置され、ペトログラードでは1918年末までに16万人以上が賄われ、また1920年2月11日にはペトログラード・ソヴィエトは階級的配給券を廃止して全市民の均等配給券を導入した（Гоголевский А. В. Указ. соч., с. 127。）他の工業地帯でも同様に失業は大きな社会問題となっていた（ см. Известия ВЦИК, 1918, 19 июля.; 2 авг.; 31 авг.）。
- (29) Изв. Наркомпранда, 1918, № 4/5, с. 53.; № 8, с. 30.
- (30) Вестник НКВД, 1918, № 10, с. 14.
- (31) Беднота, 1918, 5 апреля.
- (32) Изв. Наркомпранда, 1918, № 8, с. 30.
- (33) Кабанов В. В. Указ. соч., с. 217

3) 不満の高まり

飢餓は大衆だけでなく、ソヴィエト政権にとっても脅威であった。先ず飢餓は大衆を反ソヴィエト食糧政策に向かわせた。

ソヴィエト政府の食糧政策の基本は、臨時政府の政策を受け継いだ穀物専売制と固定買付価格制にあったが、都市労働者の中にもこれへの反対の動きが見られた。1918年8月の北部地区国民経済会議で、ペトログラードのプチロフ工場では何人かの労働者が穀物自由商業を要求していることが指摘された。⁽¹⁾ リヤザン市で開かれた第2回赤軍兵士・労働者全体集会では、穀物専売の廃止が断固要求された。ヴラジーミル県キルジャチスキイ地区労働者代表ソヴィエトと経済会議は、「穀物専売のために穀物の住民への供給が最低までになった……ことに鑑み、人民委員会議に穀物の自由買付け、搬送、販売の認可を要請する」決議を採択した。⁽²⁾ ソヴィエト政府は、食糧政策に不満を持つこれら労働者への譲歩を余儀なくされ、都市労働者に対しては労働者組織による独立買付けの認可、穀物1.5プードの特恵搬送、指定外食糧の購入の認可を合法化することになる。⁽³⁾

恐るべき飢餓は農村にパニック状態を創り出していた。カルーガ県イヴァノヴォ＝ドゥブルフスカヤ Иваново = Дубровская 郷からは、「郷は飢えている。畑は播種されないままである。住民は苛立っている。状況は恐るべき」と伝え、トヴェリ県ノヴォトルジュスク Новоторжск 郡からは次のように農民の気分が描かれている。

農民たちは飢餓で分別を失っている。飢えたものたちの群れが狼のように畑をさまよい始めている。春蒔畑は耕作されず、それ故、何も播種されていない。誰かの所に播種用の種子があるならば、飢えたものは次のように叫んでいる。「次の収穫まで生きれるように、あんた

から穀物を取り上げれば、ゆっくりと生きることが出来る。残った分は、あんたが播種できる…」。飢えたものが種子を手に入れると、種子を取り上げられたものは、惨めにも緑の春と秋の芽を見込めないような畑を耕すことになる。これはもう貧困 *оскудение* ではなく、全く完全な狂乱 *одичание*、今際の苦しみである。パニック的気分の中で人民はパニック的に行動している。飢えて疲弊した農民はこの瞬間に必要なことだけを、全ての外の残りの人とは関わりなく、意識することができる。大衆の気分は非常に不安定なので、どんな馬鹿げた風聞もその反響を見いだしている。飢餓で気も狂わんばかりの人々は、無分別な行動をしている。⁽⁴⁾

飢餓は農民に反ボリシェヴィキ感情の土壌を創り出した。

十月革命直後のウラジーミル県の農民の状態を、あるソヴィエト代表は、「状況は、とりわけ食糧事情はまことに酷いものである、……要するに多くのものが文字通り餓死しており、ここで農村クラークはボリシェヴィキ党にその責任をかぶせている」と報告している。⁽⁵⁾ 次のようなトヴェリ県からの報告は、飢餓の中で農村革命を遂行するのが如何に困難であったかを示している。

カシン *Кашин* 郡では、反革命家たちが頭角を現わした。農民の穀物と種子の不足を利用して、反ソヴィエト情宣を行っている。彼らは農民にこれは現地のソヴィエトの責任であることを示そうと苦心している。この情宣のために、ソヴィエトの改選を実施することは失敗した。しかし、農民は再びソヴィエトをボリシェヴィキから選出し、彼らの期待は裏切られた。だが反革命家の活動はそれで終わらなかった。4月28日にボス *главарь* でクラークの友人であるミローノフとラールキンのイニシアチヴで、郷会合が召集され、そこに全てのインテリと僧侶が出席した。郷のために穀物を提供することを約束したクラーク=商人、И. クズネツォーフに、穀物買付けの全権をソヴィエトが与えなかったとして、ソヴィエトが非難された。穀物について語っているとき、農民は沈黙していた。そのような聴衆の雰囲気を利用して、我が無頼漢 *молодцы* は、地主と僧侶から没収した土地を彼らに返却することまで提案するようになった。これら主人がやろうとすることが農民に明らかとなった。「乾杯、万歳」の声が始まったが、そのような演説に農民は満足せず、ミローノフとラールキンは逮捕された。

5月18日にクズネツォーフのイニシアチヴで郷スホードが召集され、彼は穀物を持ってこよう宣言した。農民は喜んだ。予期せぬことが実現されたのだ。穀物を配達するには、クズネツォーフには……ソヴィエトの管轄に移ったチーズ工場の返還、彼の工場で加工された生産物の支障なき搬出権が必要ということであった。農民は全ての条項に合意し、集会は二人の友人を必要とするクズネツォーフの要求にも合意し、カシン・ソヴィエトからの彼らの釈放を要求し、彼らは釈放された。……

クラーク層は彼らのイデオロギーと共に、その活動、破壊活動を実行している。飢餓諸県

で穀物を投機し、商業の自由を叫んでいる。穀物諸県では恐るべき犯罪を犯している、何千ブードをサモゴンカ〔自家酒造〕に費やしている。⁽⁶⁾

このような中で飢餓が農民を反乱に駆り立てるのは容易であった。例えば、ペトログラードを中心とする北部州は最も激しい穀物不足に見舞われ、ヴォロゲダ県ウスチ・スウィソリスク Усть = Сысольск 郡には、パンの半分に樹脂の混ぜ物を入れて焼いていた村や、樹皮だけを食していた村さえあった。このような北部州からの情報によれば、1918年夏に245の村で農民反乱を数えたが、そのうち217件は飢餓が原因であった。更に、これら反乱が反革命と結び付く可能性があった。内務人民委員部に入った情報によれば、反革命家たちは飢餓を反ソ宣伝に利用し、度々それが成功を納めていた。ヤロスラヴリ県ダニーロフ郡でこのような反革命的煽動⁽⁷⁾があった。

飢餓が政治的危機に転化した。ソヴィエト政府にとって飢餓の脅威は深刻になった。これについては、1918年5月31日に公表された、人民委員会義の訴えが明示的である。「最も困難な週が訪れた。疲弊した国の都市と多くの地方で穀物が足りない。……人民の敵はこの困難な状況を利用している。……先ず日々の穀物が問題である。クラークと投機人の爪からそれを奪い取ることが必要である。……モスクワに戒厳令が布告された。……飢餓と反革命は手を携えて進んでいる。我々は双方に宣戦を布告しなければならない。……」⁽⁸⁾

(1) Гоголевский А. В. Указ. соч., с. 116.

(2) Изв. Наркомпода, 1918, № 8, с. 18-19.; № 2/3, с. 20.

(3) 前掲拙稿「十月革命と穀物価格」参照。

(4) Изв. Наркомпода, 1918, № 6/7, с. 35, 36.

(5) Переписка ., т 2, с. 272.

(6) Изв. Наркомпода, 1918, № 6/7, с. 37

補註）ここで言われるサモゴンカまたはサモゴンとは、ロシア農村にとって不可欠であり、「サモゴンに有害なものはない、ある場合にはそれは必要でさえある。例えば、サモゴンと引き換えに簡単に同村人を労働に誘うことができる」とか、「サモゴンに有害なものはない、貧農にとってさえ大きな助けになるとと考えられている、何故なら労働力と家畜を雇うのに先ずサモゴンが要求されるのだから」と言われた（Яковлев Я. Деревня как она есть. М., 1923, с. 106-07.）農民の自家酒造を指す。農村の祭日には自家製ビールやサモゴンカを醸造して縁者の客をもてなした。普通の世帯ではこの日のために、ホップ、麦芽、麦粉、酵母、粉砂糖、干葡萄を材料に6 ベドロ [約74リットル] のビールと、1 ベドロのサモゴンカを造った。例えば、サモゴンカ 1 ベドロの材料は、馬鈴薯3升、麦芽15フント、酵母1フント、麦粉20フント（Большаков А. М. Деревня 1917-1927 М., 1927, с. 388.）。このようなサモゴンカが、大戦開始後「7, 8年は酒精は農村から殆ど消えた」（Carr E. H. The Interregnum, 1923-1924. Penguin books p. 44.），と E. H. カーは指摘するが、しかしこれは戦時共産主義期のロシア農村でのサモゴンカの消滅を意味しなかった（因に、ネップ初期でクルスク県ティム Тим 郡だけで5000を下らぬサモゴンカ醸造施設があった（Яковлев Я. Указ. соч., с. 111.）。1918年1月21日の第1回全ロシア食糧大会の穀物専売に関する決議で、「7）国家所有であり人民資産となる穀物が、勤労人民の利益、労働者と農民の利益の

正しい理解に無知で、評価しない市民により「サモゴンカ」の製造のために徒らに浪費されている。… …サモゴンカとの闘争は労農政府の地方権力の革命的責務である」 (Красный архив, 1939, т. 97, с. 14.) と指摘されたのは、依然サモゴンカが普及していた証左である。カーが指摘するように、例えば、トヴェリ県のある郷では1914年の開戦と共に官営酒場が閉鎖され農村の日常生活からヴォトカが消え、ビール醸造が中心となった。1917年11月30日の郷集会で酒類の禁止が決議され、高い値が付けられた変性アルコール денатура、ニスが代用された。農村は全くヴォトカを忘れてしまった。そして農村は静かになった。酔っぱらいの喧嘩はなくなり、火事の件数は減少し、妻との関係も良くなった。1921年までこの郷での状況はこのようであった (Большаков А. М. Указ. соч., с. 338.)。しかしそれでも戦時共産主義期にロシア農村でヴォトカ醸造がなくなった訳ではなかった。十月革命直後の1917年11月にウファー県メンゼリンスクメンゼリンスク郡から、「郡ではサモゴンカの醸造に、即ち酒精の醸造に毎日何百ブードが消耗されている。醉漢はどこでも見ることができる」と伝えられ (Переписка..., т. 2, с. 299.), 1918年の収穫以後ハリコフでは酒造工場は農民から大々的に馬鈴薯を買付け、ヴォロネジ県ノヴォホルスク Новохоперск ではドンで盛んな酒精醸造のために、穀物が買い漁られていた (Правда, 1918, 7 авг.; Известия ВЦИК 1918, 23 окт.)。サモゴンカによる穀物消費量は莫大であった。例えば、1913年にトヴェリ県の1137経営からなるある郷では年間5万ブード余りのライ麦がサモゴンカに費やされ、これは郷収穫の2/3に相当した (Большаков А. М. Указ. соч., с. 337.)、戦時共産主義期でも同様であった。サラトフ県ペトロフスクПетровск郡の250世帯からなるある村では、1ブードの麦粉から2ヴェドロ [約24.6リットル] のヴォトカ вино を造り、1瓶5-6ルーブリで販売し、毎日酒造に麦粉約100ブードが消費されていた (Беднота, 1918, 5 апреля.)。シベリアではかつぎ屋による穀物の搬出が困難になつたために、現地でのサモゴンカが盛んになり、西シベリア・クルガン地区の幾つかの郷では1日1000ブードの穀物がサモゴンカに費やされ、アルタイ県だけでも1500万ブードの穀物が蒸留された (Изв. Наркомпода, 1918, № 4/5 с. 48.)。控え目に見積っても、シベリアだけで2500万ブードの穀物がサモゴンカに消耗された (Осипова Т. В. — История советского крестьянства. т. 1, с. 63.)。

(7) Кульшев Ю. С., Тылик С. Ф. Борьба за хлеб., 1972, с. 65.

(8) Изв. Наркомпода, 1918, № 1, с. 23

(9) Правда, 1918, 31 мая.

4) 飢餓の原因

ソヴィエト政府が食糧危機を乗り切るために採った非常措置については次章以下に譲るとして、1918年の飢餓の要因の幾つかに触れておこう。

(1) 固定価格

1917年収穫は戦前に比べて大きな落ち込みがなかったにも拘らず、飢餓が生じたず第一の原因是、農民が穀物の供出を拒否したからであり、これは穀物固定価格に問題があった。

ソヴィエト政府は、1917年8月に臨時政府の定めた国家固定調達価格を受け継いだが、これについては先ず、当時のボリシェヴィキの見解に耳を傾けよう。В. カルピーンスキイは次のように述べている。

……穀物県 (ヴォロネジ) に関する具体的数字を引用することができる。土地の1デシャチーナはここでは平均15山 копна の収穫を与える。1山は平均7枚 мера を、即ち約穀物9

プードを与える。そのように1デシャチーナは平均収穫で $9 \times 15 = 135$ プードを、豊作では185プードまで与える。

この地方で穀物の固定価格は1プード6ルーブリ。平均収穫で1デシャチーナ当りの総収入は約800ルーブリ、豊作なら1100ルーブリ。穀物の刈入れと脱穀のデシャチーナの耕作に関する支出はこれら収入に比べ僅か。1917年でそれは90ルーブリ。……

しかしこれを指摘しなければならない。クラークは現金で殆ど決算せず、あらゆる農耕で貧農を隸属させ、耕作に関する彼の支出は少ない。更に、多くのものには倉庫に前年までの収穫がある。これら地方では500—700プード以上の穀物を持つクラークに会うのも稀ではない。……

貧農は穀物が不足し、彼らは同村人から「自由」（勿論、クラークにとっての「自由」）価格で穀物を購入し、略取者に隸属しなければならない。

現実の活動は次のことを示している。ソヴィエト権力は農村ブルジョワジーとの最も決定的闘争の中で、貧農の側からの強力な支持に出会うであろう。⁽¹⁾

しかし現実には、この価格は市況を全く反映していないだけでなく、生産原価にも食い込むほどの低さであった。当時の経済学者ミリューチンによれば、ライ麦1プードの生産原価は6.3—12.3ルーブリであったが、固定価格はオロネツ県の6.1ルーブリが最高であった。⁽²⁾当然にも、農民はこのような調達価格での国家への穀物供出を拒否した。例えば、カルピーンスキイが実例として挙げたヴォロネジ県では、県には穀物貯蔵を持つ郡が幾つかあるが、郷ソヴィエトは固定価格では穀物を引き渡さず、ようやく16ルーブリで承知した、専売と固定価格はそれを全て駄目にする方向で行なわれている、と報告された。1918年の収穫が実現された後でも、ここでは穀物市場価格は60—70ルーブリを維持していた。⁽³⁾

また地方権力は独自に現地の固定価格を定めた。トヴェリ県ノヴォトルジュスク郡執行委員会は1プード45ルーブリで調達していた。⁽⁴⁾このような地方権力による固定価格の引き上げは、農民に更に引き上げの期待感を抱かせ、自発的供出を益々困難にした。ヴィヤトカ県からは次のように報告された。

「食糧組織は系統的な穀物価格の引き上げと自由買付けの認可により穀物専売をなし崩しにしている。第1、2回全県ソヴィエト大会は全県での固定価格の廃止を承認した。この外、諸郡ソヴィエトは自らの要求にしたがって多少とも高い価格を定めた。この結果固定価格での買付けは不可能になった。現在まで1プード当り12—15ルーブリで販売していた農民が（価格を40—50ルーブリに引き上げていたかつぎ屋は言うまでもなく），〔1917年〕8月価格でやっていけると考えることはできない。唯一の解決策として徵發が残っている」。⁽⁵⁾

農民は時にはこのような低い価格での調達に頑強に抵抗した。1917年収穫で穀物500万プード、飼料用穀物300万プードがあると推算されたトゥーラ県でも、クラークは貧農を巻き込み、銃、機関銃、大砲で武装し、結局食糧部隊は、ライ麦は固定価格4ルーブリ80カペイクに対し

20ルーブリ、同じくオート麦は5ルーブリ6カペイクに対し15ルーブリで調達することができただけであった。こうして、低い固定価格による穀物供出は農民の生産意欲を減退させ、播種面積を縮小させ、収穫の一部は刈り入れられずに放置され、1917年の秋以来大衆的性格を帯びた穀物隠匿が昂進された。⁽⁶⁾多くの地方で、農民は穀物の徵発から穀物を隠匿しようと望み、それを土や糞⁽⁷⁾に⁽⁸⁾穀物を隠匿しようとした。

穀物専売と固定価格制を不動の政策として堅持するためには、穀物固定価の大幅な引き上げが必要であった。

穀物不足が特に深刻なペトログラードを中心に北部8諸県を統轄する北部州食糧参事会は、「国の救済は穀物専売の保全と遵守の下でのみ可能である」との決定に立ち、⁽⁹⁾同参事会は1918年6月半ばに、プレミアとして1ヶ月以内に自發的に穀物を供出した場合には、固定価格の2倍を支払うよう指示した。⁽¹⁰⁾7月の北部州食糧大会で、固定価格は以前から侵犯され、様々な組織や大会で穀物価格は18~22ルーブリに定められてきた、そこで〔北部州食糧〕参事会は再三、食糧人民委員部に地方価格で穀物を購入すること（ヴィヤトカ県では1プード13~15ルーブリ、サラトフ県では18~22ルーブリ）を認めるよう請願したが、拒否された、と中央への不満が表明された。⁽¹¹⁾しかし中央政府は固定価格の維持に固守した。

食糧人民委員部が穀物固定価格の引き上げに頑なに反対した理由は幾つかある。先ず、穀物貯蔵を持つのはクラークと投機人であり、価格の引き上げは彼らを利するだけだと考えられた。⁽¹²⁾また穀物が不足する貧農はその購入を余儀なくされ、労働者階級と同じく彼らにとっても低い穀物価格が有利であった。⁽¹³⁾第二に、地方によっては、穀物価格の引き上げは穀物調達量を増やすなかった。⁽¹⁴⁾第三に、度重なる固定価格の引き上げは、益々市場価格を高騰させ、穀物穩匿を増やすと考えられていた。⁽¹⁵⁾そして第四に、最大の理由は、貨幣によってではなく商品交換制度により穀物が調達できると想定されていたことである。つまり「以前は決して貨幣を持つことのなかった農村が現在は必要以上に遙かに多くの貨幣を持っているが、同時に農村経営と日常必要な財を持っていない。そのような条件では、農民は非常に低いと感じている固定価格では、穀物を販売したがらないことは明白である。その上、遙かに高い投機価格で販売する機会を充分に持っている。従って、貨幣でなく都市はその生産物を農村のために提供し、都市は専らそれと交換に穀物と農産物を受け取らなければならない」と言うものである。⁽¹⁶⁾しかし商品交換は充分に機能することなく崩壊した。⁽¹⁷⁾ようやく1918年8月8日付けで主要穀物固定価格がほぼ3倍に引き上げられた（例えば、ライ麦価格は地域に応じて12ルーブリ25カペイクから18ルーブリ25カペイクまで）。穀物価格が不斷に高騰し、麦粉が自由価格で1プード200~300ルーブリにまでなっている時に、これさえもボリシェヴィキからはソヴィエト権力の食糧政策での著しい譲歩といわれた。⁽¹⁸⁾

明らかに低い穀物固定価格で専売制を維持しようとする食糧人民委員部の政策は誤りであつ

た。食糧活動家 H. オルローフは「今日の経済政策の原理としての穀物専売は、生産者農民に敵対しているのだろうか」とその疑問に対して次のように述べている。

穀物やその他の農業生産物の価格の大きな上昇を見て、住民は単純で、一見して議論の余地の無い結論を出すだろう。低い固定価格と高い自由価格の下での穀物の収用、これは明らかに都市の消費者、主に労働者の都合による農村の強奪である。もし国家権力が農民から安い穀物を汲み出そうとする志向に固執するなら、もし自分の苦しい労働の生産物を「ただで даром」引き渡したくないものに力を行使しようと考えるなら、これは全ての勤労農村住民への宣戦布告ではないだろうか！

…もし国家が安い穀物と交換に農夫に安く充分な量の工業生産物を提供するなら、穀物専売と基準価格に耐えるのも、それほど悪くはないだろう。これを国家は今日までしなかったし、「明らかに」できないので、穀物専売と穀物の固定価格よ無くなれ、商業の自由万歳⁽¹⁹⁾！

- (1) Известия ВЦИК, 1918, 6 июня.
- (2) Милютин В. П. Народное хозяйство, 1918, № 8/9, с. 2.
- (3) Изв. Наркомпрада, 1918, № 16/17, с. 44.
- (4) Переписка^{..}, т 4, с. 90.
- (5) Изв. Наркомпрада, 1918, № 10/11, с. 25.
- (6) Изв. Наркомпрада, 1918, № 6/7, с. 38.
- (7) Волобуев П. В. Указ. соч., с. 419.
- (8) Известия ВЦИК, 1918, 10 мая.
- (9) Известия ВЦИК, 1918, 10 мая. 同議長は、元メンシェヴィキの В. Г. グローマンであり、レーニンは、穀物自由商業を主張していると彼を非難しているが、これには全く根拠がない(Ленин В. И. Полн Собр. соч., т 36, с. 403-04.)。
- (10) Изв. Наркомпрада, 1918, № 2/3, с. 19.
- (11) Изв. Наркомпрада, 1918, № 16/17, с. 21.
- (12) 1918年6月の中央委員会でのレーニン(Ленин В. И. Полн Собр. соч., т 36, с. 401.)、第5回ソヴィエト大会でのツュルーバの発言(Пятый Всероссийский съезд советов рабочих, крестьянских солдатских и казачьих депутатов: Стеногр. отчет, М., с. 137.)。
- (13) 例えは、このような主張は Н. Б. Правда, 1918, 18 авг しかしこの論文は同時に、土地経営を営むために中農は穀物価格と等しい工業価格を要求していると、適切な主張をしている。
- (14) このような実例として、ツュルーバは第5回ソヴィエト大会で、価格を12ルーブリに引き上げたカザン県の例を引き(Пятый съезд советов: с. 137-38.)、5月の北部州食糧大会では、クバン州、スタヴロボリ県の例が取り上げられた(Известия ВЦИК, 1918, 15 мая.)。
- (15) 早くも、1917年11月2日に食糧人民委員 И. А. テオドローヴィッチは、穀物固定価格を2倍に引き上げた臨時政府布告は、穀物価格を更に高騰させ、穀物を増やしたと、批判した(Правда, 1917, 2 нояб.)。また1918年5月に開かれたモスクワ県食糧大会で、サラトフ県代表ボグダーノヴァは、大会は固定価格の廃止を提案するかも知れないが、そのような提案は破滅的であろう、固定価格の廃止は穀物調達量を増やすないであろうし、その市場価格を法外に高騰させるであろうと発言して、彼女は、3月12日に危

機的状況により固定価格が廃止されたサラトフ県で、2,3日後に穀物価格は1ブード150ルーブリから400ルーブリに高騰した例を挙げた。それでも大会決議では「穀物固定価格は大衆消費財の固定価格に合致しなければならない」、即ち実質的に穀物固定価格の引き上げが唱われた (Известия ВЦИК, 1918, 19 мая.)。

(16) Арский Р. Известия ВЦИК, 1918, 3 окт

(17) これについては前掲「ロシア革命直後の食糧政策」参照。マッレは農業と工業の価格差を過小評価し、農民は貨幣交換を拒否しなかったとする (Malle S. op. cit., p. 339.)。確かに地方での深刻な紙幣危機が幾つか報道された。例えば、1918年夏のサマラでは紙幣が完全に流通から消えパニック的気分が醸し出された、このため多くの企業や商店は閉鎖され、農民は都市への麦粉と食糧の搬出を停止した (Известия ВЦИК, 1918, 23 июля.). しかし、この実例から看取できるように農民は、都市での投機価格による穀物の販売に合意していたのである。農業価格に固定価格と自由価格が存在していたことがマッレには看過されている。「紙幣は価値蓄積の手段として全く役立っていない。農民は紙幣をフントで量り、自分の家に紙幣を貼付けて自慢する」という見せかけの富としての紙幣 (Известия ВЦИК: приложение, 1918, 9 июля.) の役割が真実に近いであろう。

(18) Е. Я. Правда, 1918, 9 авг

(19) Изв. Наркомпрада, 1918, № 4/5, с. 7-8.

(2) 鉄道輸送

穀物搬送のためには、円滑な鉄道輸送が必須条件であった。しかし戦争と革命により鉄道網は寸断されていた。ロシア鉄道網は1917年1月まで6万4526ヴェルスタを維持していたが、リガ撤退後は縮小し、1917年11月には5万2579ヴェルスタに、そしてドイツ軍による西部とウクライナの占領によって1918年5月には更に3万9336ヴェルスタにまで縮小した。⁽¹⁾ 交通人民委員部の管轄には約6万両の貨車と2万両の機関車があったが、要修理の機関車の割合は18年には36%に達し、16年の3倍にもなっていた。特に、モスクワ、ペトログラードを含む北部管区の鉄道では故障機関車の割合は高く、1918年5月の41から同年9月には43%になった。⁽²⁾

既に、1917年10月までに重要鉄道の鉄道運行は半分に麻痺していた。経済学者C. H. プロコポーヴィッヂ教授は10月20日の会議で、「ペトログラード、モスクワ、北部戦線への食糧貨物の接近は殆ど完全に停止した」ことを報告した。⁽³⁾ 1918年にはこのような状態が更に悪化し、1918年6月には同年1月に比べ、貨物輸送量は3%にまで激減し、18年5月の穀物調達は計画の1/4以下であった。⁽⁴⁾ このため、速やかな穀物貨物の運行に向けての措置を探る旨の電報が何度となく出された。⁽⁵⁾ 燃料危機により南東鉄道は運行不能の状態に陥り、このため南部、南東部の鉄道には穀物が放置されたままになった。⁽⁶⁾ ウファー県では地方権力により、集荷場からの穀物搬出が妨害され、穀物の50%が滞った。⁽⁷⁾ 逆に消費県トゥーラでは、5月15日以後麦粉の輸送が完全に停止し、重大な食糧危機を蒙っていた。⁽⁸⁾ トヴェリ県では7月半ば、労働者に配給券で半フント、非労働者に1/8フントを交付するためには最低限1日貨車2両が必要であったが、7月前半で14両が到着しただけで、その後は1両の貨車も到着しない有様であった。⁽⁹⁾ ヴォログダ県で

は、列車がないために微発された穀物を住民間に引き渡すことができなかった。また商品交換用の織物を積んだ貨車が時には丸1ヶ月も鉄道線路にあった。このような事態を開拓するため、幾度か旅客輸送が禁止された。1918年4月15日以後、クルスクからの食糧貯蔵の撤退のため、⁽¹⁰⁾ クルスク＝オリョール区域で旅客輸送が禁止され、⁽¹¹⁾ 1919年3月13日から4月10日までカザン、リヤザン＝ウラル、クルスク線で滞貨している約300万プードの穀物輸送のために、旅客輸送は全面的に禁止された。⁽¹²⁾

こうした物理的障害に加えて、組織的欠陥があった。十月革命後まもない1917年11月に、ヘリソン県アレクサンドリア Александрия 郡では鉄道管理エイジェントの責任で貨物が滞貨し、引き込み線に貨物を滞らせ、荷卸せず、穀物を腐らすままにしていた。⁽¹³⁾ また幾かの地方は、穀物の搬出禁止命令を出し、地域の自給を図った。1918年6月にはシムビリスク県は穀物の搬出を禁止した。⁽¹⁴⁾ ヴォロネジ、カザン、タムボフ県では生産県と認定されながら、地方権力により穀物の搬出が禁止された。⁽¹⁵⁾ タムボフ県コミサールは馬鈴薯の積載を全駅長に禁止する命令を出した。⁽¹⁶⁾ 非ボリシェヴィキ系組織、鉄道組合全ロシア執行委員会=ヴィクジェリもソヴィエト政府には敵対的で、1918年1月9日付で、重要な穀倉地帯、西シベリア、ウラル・クライ・ソヴィエトは「[1917年] 12月13日からオムスク鉄道は西部に食糧貨物を送らず、この方面で穀物、その他の食糧貨物の積載を行っていない。ヴィクジェリはオムスクから西部への貨物輸送の整備に何等措置を探ってない」と人民委員会議に打電した。⁽¹⁷⁾

更にこのような乏しい穀物貨物が様々な形で略奪された。交通防衛に関する全ロシア非常委員会は、鉄道従業員の職務遂行の際に彼らに加えられる圧力、貨物の窃盗、貨物運行の妨害に對しては、積極的抵抗の場合には射殺にいたる断固たる措置を探るよう指示した。⁽¹⁸⁾ しかし鉄道貨物の略奪は止まらなかった。1918年3月までに北部州食糧委に入った情報によれば、穀物貨物は輸送途上で様々な組織による勝手な徴収が行われており、中央で作成された供給計画は完全に損なわれ、困難な事態を一層悪化させていた。⁽¹⁹⁾ 例えば、内務人民委員部が受け取った電報情報によれば、ペトログラード県の北部鉄道エフィモフスカヤ Ефимовская 駅で、ペトログラードへの麦粉貨物が武装農民により、連結器を外され略奪された。同じ線のカドゥイ駅でオート麦の貨車6輛、ライ麦、小麦、麦粉の貨車が同様に略奪された。ネチャエフスカヤ駅でもモスクワ食糧委員会宛の200万ルーブリに相当する小麦貨車が略奪された。このほか内務人民委員部に入った報告でも、地方ソヴィエトと住民は鉄道運行を阻止していた。⁽²⁰⁾ ペトログラード県ティフビン Тихвин 駅から次のような例が報告された。

「北部線で穀物貨物を連結した列車はエフィモフスカヤ駅近くで飢えた農民の銃撃を受けた。幾つかの近隣村の大量の農民の群れが森で列車を待ち伏せていた。列車が現れたとき、バラバラに銃撃がなされ、この間約10人が負傷するか殺された。列車を占領した農民は、麦粉貨車9輛を切り放し、道床で略奪した麦粉を分け始めた。分け前の際に新たな騒動が свалка が起った、そこでまた何人かが犠牲になった。その結果3000プードの略奪された麦粉は殆ど

が道に蒔き散らかされてしまった」。

勿論このような現象は地方からも頻繁に報告され、ニコラエフスク鉄道管轄のルイビンスク駅では穀物貨車13輢が、コストロマ県ブーイ駅では4輢が差し抑えられ、そのほかチェレポヴェツの大きな駅でも穀物貨物列車を勝手に切り離し、穀物を力なくでも略取する場合が繰り返し起っていた。⁽²³⁾ 穀物県、タムボフでもあちこちに食糧列車を襲撃する武装団が出現し、食糧業務を困難に陥れ、そこに派遣された食糧人民委員部全権は次のようにその様子を打電した。

タムボフ県での食糧問題はタムボフ、コズロフ Козлов での無秩序に関連し、破滅的様相である。貨車22輢の直通列車が運行されている。……タムボフで武器、機関銃、ライフルを持つ窃盜者 *расхитители* が、再び動き始め村毎に分散し、戸外で射撃訓練をした。……昨夜武装団が穀物を積んだこの直通列車を捕獲しようとしたために、閻食糧取締部隊を、次いで微発部隊を要請し、トラヴェル駅から列車を護衛をしなければならなかった。射撃がおさまったとき、晩の11時に列車は静かに出発し、両側に配された部隊は、3丁の機関銃を発射する武装団を攻撃した。……閻取締部隊は毎日、軍団 *эшелон* からの危険に晒されている。……コchetofka Kочетоквка で部隊は銃撃を受け、死者が出た。ホボトフ Хоботох に300人の部隊があり、それは昨日コズロフ方面から攻撃された。そのような困難な状況では、今後活動が不可能である。⁽²⁴⁾

こうした鉄道の混乱の状況では、飢えた両首都に地方で発送された穀物貨物が到着しなかった。不完全な資料によれば、1918年1月に地方から発送された穀物貨車271輢のうち、到着したのは僅か107輢、2月は238輢のうち139輢しかなかった。⁽²⁵⁾ 当然、穀物貨物輸送計画は進歩せず、1918年4月にはモスクワは予定された積載貨物の15.5%を受け取っただけで、6月には12.7%にまで低下した。ペトログラードは各々8.9から6.9%まで更に低い数字であった。⁽²⁶⁾

(1) Тер В Известия ВЦИК, 1918, 7 дек.

(2) Изв. Наркомпрода, 1918, № 9, с. 35.; Народное хозяйство, 1919, № 1/2, с. 62.

(3) Волобуев П. В. Указ. соч., с. 294

(4) Народное хозяйство, 1919, № 6, с. 94.; Известия ВЦИК, 1918, 10 мая.

(5) см. Известия ВЦИК, 1918, 11 мая.; 19 июня.; 14 авг

(6) Изв. Наркомпрода, 1918, № 10/11, с. 44.; Михайлов И. Д. Народное хозяйство, 1919, № 5, с. 19.

(7) Лесев В. Известия ВЦИК, 1918, 22 мая.

(8) Известия ВЦИК, 1918, 16 мая.

(9) Изв. Наркомпрода, 1918, № 16/17, с. 56.

(10) Изв. Наркомпрода, 1918, № 12/13, с. 53.

(11) Известия ВЦИК, 1918, 12 июля.

(12) Известия ВЦИК, 1918, 16 апреля.

(13) Беднота, 1919, 12 марта.

- (14) Переписка'', т 2, с. 288.
- (15) Изв. Наркомпранда, 1918, № 9, с. 30.
- (16) Изв. Наркомпранда, 1918, № 12/13, с. 37
- (17) Известия ВЦИК, 1918, 21 июля.
- (18) Красный архив, 1939, т 97, с. 11
- (19) Изв. Наркомпранда, 1918, № 1, с. 18.
- (20) Известия ВЦИК, 1918, 27 марта.
- (21) Известия ВЦИК, 1918, 6 июня.
- (22) Изв. Наркомпранда, 1918, № 6/7, с. 35.
- (23) Изв. Наркомпранда, 1918, № 12/13, с. 54.
- (24) Изв. Наркомпранда, 1918, № 10/11, с. 39.
- (25) Бабурин Д. С. Исторические записки, 1957, т 61, с. 340.
- (26) Народное хозяйство. приложение, 1918, № 10, с. 5.

(3) 組織

中央農業諸県を中心に幾つかの県、郡ソヴィエト段階で穀物固定価格、穀物専売制の廃止決議が1918年に出されたことは、既に別稿で論じたのでここでは触れない。⁽¹⁾

1918年5月27日布告により、地方の食糧組織が食糧人民委員部の下に一元的に統合されるまでは、各地で様々な食糧組織が複雑に絡み合いながら活動し、その構成も多様であった。

4月の北部州委員会代表者会議は、「地方では様々な組織の活動に不調和音が聴かれ、消費諸県の代表は相互に競合し、住民はどんな委員会も重んじることなく、これら委員会の決定は中央権力の活動を切断している」と指摘した。⁽²⁾ 専売制と固定価格が審議された同月のモスクワ州大会では、地方からの一連の報告者は、悪いのは固定価格ではなく地方での食糧組織の解体であり、地方では食糧組織の大部分が全く独自に活動し、飢餓諸県の要求を考慮していないことが指摘された。⁽³⁾

各地からの情報でもそれが確認される。ニジェゴロド県クニャギニノКнягинино郡からは、県の穀物は少なく、幾つかの郷では飢餓が訪れているが、県で行われてる無秩序な徵發が苦しい食糧危機を招いたと、農業人民委員部に報告された。⁽⁴⁾ ヴォロネジ県では収穫と貯蔵の登録に関して如何なる措置も採られなかった。県食糧参事會はどれだけ徵収すべきか確定できる情報を持っていないかった。組織された機関はどこにもなく、ある郡が命令書を出し、またある郡が別の命令書を出す具合で、郷ソヴィエトもそのような命令書を全く考慮していなかった。⁽⁵⁾

主要な調達地区と見做されていた周辺地方での組織的活動は特に劣悪であった。食糧全權A. Г.シリーフェルによれば、必要量のほぼ半分の3000万プードを調達することになっていた1918年春のシベリアの状況は次のようにあった。

西シベリアとウラルの食糧業務の組織化は、中央食糧組織としてのクライ・ソヴィエトとそれの下部官庁の県、郡食糧参事會の手にある。……シベリアでの上述の全組織の再編過程は

最近始まり、まだ終了していないので、しかるべき人物を全面的には集めていない。……エミール〔派遣委員〕は次のように報告している。再三の電報と個人的要請にも拘らず、穀物命令書は僅かしか入らず、集荷場の納屋は溢れ、このため現地ソヴィエトによって集荷場での穀物の受取りは停止された。食糧組織間の密接な関係の欠如が食糧業務の大きな悪をもたらしている。地方との関係は、シベリアの大きな空間と交通の技術手段の欠如により非常に悪い。地方からの情報は不正確にしか入らず、非常にしばしば現実と一致していない。中央により派遣された活動家が、時には穀物の現有貯蔵に関する正確な情報を得るためにクライ・ソヴィエトを利用された。……多くの地方との関係は全くない。クライ・ソヴィエトは現有貯蔵に関する情報を全く持たず、このため幾つかの地方では露天で、袋に詰められて穀物貯蔵が蓄えられ、暑い天気では腐ったり、燃え出す恐れがある。⁽⁶⁾

食糧機関の人的構成にも問題があった。ヴィヤトカ県マルムイジュ Малмыж 郡の食糧業務は郡供給ソヴィエトが司っていたが、その多くがクラークで、旧警察署長さえ入っており、食糧業務を知らない人物が食糧業務の長となっており、食糧組織が穀物調達での主要な障害の一つである、といわれ、郡食糧機関は様々な組織の代表と勝手な穀物買付けを認可していた。⁽⁷⁾ プスコフ県ではソヴィエト食糧部が食糧を司っていたが、そこでは旧食糧参事会メンバーが勤務し、重要なポストを占めており、都市では穀物は100~200ルーブリの非常に高い価格で販売され、穀物が原因での戦闘 сражение が起っていた。⁽⁸⁾ ヤロスダヴリ県では、1917年12月に旧食糧参事会から業務を引き継いだ県食糧部は食糧不足の全責任を以前の組織に負わせたが、事実は「ヤロスラブリ県での食糧崩壊は自然的条件によるのではなく、食糧部指導者の完全な無活動、孤立無援、許し難い無理解の結果であることを明白に物語っている」と報告があった。⁽⁹⁾ ヴィテフスク市食糧部は、利害関係のある食品労働組合の参加を認めず、共同パン焼き所の開設も認めず、これは「地方の食糧施設の官僚主義」と言われた。⁽¹⁰⁾ ようやく1918年秋以後食糧機関の組織問題が議論されるようになり、「我々は食糧機関から怠業者 саботант を一掃しつつあることを認めよう。(怠業者とは勿論エスエル=カデットにひっかかった不幸な小官吏ではなく、フランス語で sabotier, ロシア語で活動を駄目にする人を意味する)」と H. オルローフは論じた。⁽¹¹⁾

こうした中、ソヴィエト職員の間にも食糧活動での逸脱がみられた。ヴォロネジ県では、鉄道での穀物の差押えの際に受取書が交付されず、これは差押え人の職権濫用の風聞に根拠を与えるものである、と言われた。⁽¹²⁾ またクルスク県ソルンツェボ駅で活動している部隊は、貨物の没収の際に受取書を交付せず、没収された穀物全部が集荷場に納められないとの風聞を生み出し、煙草ケースまで没収し、この活動は批判に堪えないと報告された。⁽¹³⁾ ヴィテフスク県ネヴェリ Невель 郡プロスコフスカヤ Плосковская 郷のソヴィエト議長と食糧コミサールもクラークであった、議長の納屋は150~200プードの穀物で充されていたが、コミサールはそれを60プードにしか登録せず、現地の固定価格は50ルーブリと定められていたが、この議長は255ルーブリでそれを販売していた。⁽¹⁴⁾ コストロマ県スタロホルブジュスカヤ Старохолбужская 郷執

行委員会議長は、隠匿していた牛をクラークに屠殺するよう命じ、彼から賄賂として肉1プードを受け取った。またモレンスク県の郷ソヴィエトには、酒の投機人がおり、以前に酒精を商っていた彼の長兄もソヴィエト財務部部長で、共に共産党細胞のメンバーであった。また同じスモレンスク県のある郵便局職員は、職務であちこち出かける機会を利用して、1プード30—40ルーブリで手に入れた塩を450ルーブリで販売していった。⁽¹⁵⁾

1918年4月のモスクワ州食糧委員会の会議での地方からの報告者の言葉によれば、現地では食糧命令の遂行率は20~50%であった。⁽¹⁶⁾ 地方によっては更に遂行率は破滅的で、ヴォログダ県では十月革命以前は穀物貨物の搬入率は65%に達していたが、1918年1月には9%，2月は3%，それ以後は指令は殆ど全く遂行されなかつた。⁽¹⁷⁾

食糧活動の混乱の主要な原因が食糧機関そのものにあったことは明白であった。食糧人民委員ツュルーパは1918年5月の会見記事で、「我が活動は地方権力の非組織的活動により妨げられている。地方権力は時には、我々を援助する替わりにその命令書で業務を妨げている。地方の食糧組織は殆ど完全に活動を停止している」と述べ、結語で、「食糧人民委員部は供給コミサリアートを再編するであろう」と伝えた。⁽¹⁸⁾ こうした特に地方での食糧機関の組織上の混乱は、それ以後の食糧独裁を必然化させたのであった。

結論的に言えば、1918年に飢餓を昂進させたのは、明らかにソヴィエト政府の政策上の誤りと組織上の混乱であった。

1918年12月21日の第2回国民経済会議全ロシア大会で、最高国民経済会議長 A. I. ルイコフは率直に次のように表現した。

現在の状態は、生産物が欠けているだけでなく、戦争の結果と対外的状況により創り出された飢餓に、我々が送付すべき商品を消費者に送付することができなかったことにより引き起こされた人為的飢餓が、合わさって生み出された。我が経済システムの最も主要な欠陥がここにあり、中央組織だけにこの責任があるのでなく、ロシアの全経済組織に責任がある。ソヴィエトロシアの一部で起こった農民騒擾に対し、著しい程度に、供給組織の欠如または不足に責任がある。我が任務は、分配計画に従って全力で農村に供給するよう努めることである。都市への穀物の納入不足の責任は、少量でも、農村への分配用に指定された財さえも分配することができなかった組織が負っている。⁽¹⁹⁾

しかしこうした厳しい現実認識にも拘らず、これ以後ソヴィエト経済は混迷を深め、ボリシェヴィキ権力は統制力と強制力を強め、食糧問題で農村との全面対決を強いられることになる。

(1) 拙稿「十月革命と穀物価格」参照。

(2) Известия ВЦИК, 1918, 10 мая.

(3) Известия ВЦИК, 1918, 30 апреля.; Изв. Наркомпрада, 1918, № 2/3, с. 19.

(4) Красный архив, 1938, т. 85, с. 98.

- (5) Изв. Наркомпрода, 1918, № 10/11, с. 26.; № 16/17, с. 44.
- (6) Изв. Наркомпрода, 1918, № 4, с. 48.
- (7) Изв. Наркомпрода, 1918, № 10/11, с. 25-26 供給ソヴィエトとは1918年1月の第1回全ロシア食糧大会で設置された食糧業務の最高審議機関の地方組織。ソヴィエトに従属していたが、1918年5月27日付け布告による食糧機関再編に伴い、食糧人民委員部の地方機関に従属し、農産物の調達、商品交換実施での商品の供給を司った。
- (8) Известия ВЦИК, 1918, 4 мая.
- (9) Изв. Наркомпрода, 1918, № 10/11, с. 24.
- (10) Известия ВЦИК, 1918, 6 дек.
- (11) Известия ВЦИК, 1918, 29 нояб.
- (12) Изв. Наркомпрода, 1918, № 10/11, с. 26.
- (13) Изв. Наркомпрода, 1918, № 12/13, с. 31.
- (14) Изв. Наркомпрода, 1918, № 9, с. 29.
- (15) Беднота, 1919, 21 марта.
- (16) Известия ВЦИК, 1918, 27 апреля.
- (17) Изв. Наркомпрода, 1918, № 10/11, с. 26.
- (18) Известия ВЦИК, 1918, 12 мая.
- (19) Известия ВЦИК, 1918, 25 дек.

第1章 了」